

# セントクリストファーネビスの夜

## 御宮狼

### 第六話

\*

土曜日になった。

香村は車で出かけた。

巨大駐車場に車を置いて、横断歩道を過ぎ、青いTシャツを着た整備員を振りきった。正面ゲートに入る。背後から整備員が何事か話しかけてきたが、香村はそのままゲートを抜けた。

乾いたコンクリート階段を足早に昇った。生ビールの紙コップを手にした男女とぶつかりそうになった。怒声を浴びた。香村は振り向かなかった。

ドアを押し開けると風が吹き込み、すり鉢状のスタンドが青空とともに視界にいきなり迫った。

五万人を収容するスタンドは傾斜のきつい段差をつくり中心底のグリーンのテニスコートを囲んでいる。青とオレンジと緑色のベンチが昨夜の雨で光っている。競技場を覆う楕円形の巨大な屋根が静かにゆっくりと二つに割れて、雲のない九月の空が現れる。

電光掲示板が決勝トーナメントの対戦者の名前を映し出した。試合前のウォーミングアップが始まる。挑戦者が高々と打ち上げた黄色いボールは大きな弧を描いてスタンドに落ちていく。観客が喜んでいる。

香村は高熱で焦げ付きそうなスタンド最上段の席に座った。

「神様がくれた御褒美」

「何それ」

「飛んでくるテニスボールのことよ。ユダヤ人が言った」

「テニスプレーヤーは迫害されるんだね」  
「神様の意図をひっして打ちかえす」  
「道徳的でない人々の遊戯がいい」  
「いっしょに見に行きましょうよ。それも無名の選手がいいわ。無名の選手達による無欲のゲーム。そうね、それがいい。そのあとで食事に行きましょう。しばらくあなたとしてないわ。私が招待するわ」

二人の対戦相手を前に主審によるコインのトスが始まる。

「あなたと共有した時間はひどく色褪せて、哀しくいびつな形でころがっている。輪郭を失い、いまにも蒸発してしまいそう。そうね正体もなく、手応えもなく軽い。横たわる藁のような……。だけど藁は、海辺の砂浜で打ち上げられては海へ引きずられ、逡巡をくりかえしながら浮んでいるわ」

グリーンの上で一つ回転したコインは裏を上にして止まり、挑戦者が先制サーブの権利を獲得した。

「ほら、いつものように神様の降臨でゲームは始まるの。コインは空から落ちてくる。裏と表。運、不運。愛と憎しみ……。ゼーンぶ空から降ってくる」

「そんな先のことはわからない」

香村は空を仰いだ。その空の青さは表現を拒否し、沈黙を張り、独立的で引き寄せることができない。

もうだいぶ昔のことだ。雁木坂の石段の頂上にあるフランス料理屋で香村とケイは向かい合っている。真夏。木漏れ日のかかる窓際。テーブルに赤ワインの瓶とグラス。グラスを口に運ぶ彼女の左中指には乳白色の石がはめられている。

「指輪は奴隷の印ね」

ボレー。

ボールはスピンして跳ね、ネットに吸い込まれて落ちた。

「ラブフィフティーン」

人々が悲鳴をあげた。

目が覚めるとケイの体は朝日の中でいつも輝いていた。何かが振動し何かが聴こえてきた。遠くで雅楽が動く。まるで古代のなかで魚が泳ぐようにその響きは神秘的だった。

「冷えたミルク。珈琲」

「そしてボール一杯の野菜ね。それと果物はかかせない」

「それだけで朝はじゅうぶんなんだ」

「私はバタートーストにジャムをふんだんにのせるのが好き。夜にはたっぴりと時間をかけて、ふたりだけで食事をしましょう。毎日ね」

「そうだね。毎日だね」

人生は生きているうちは複雑だけれど振り返ると単純なものだというようなことを彼女はよく話をした。結婚はより単純なものを残していく作業だろう。複雑なものより単純なものをよく愛する術はケイの方が何枚も上だった。

クリスマスも近く迫った日浮かれた街を抜けて郊外のレストランに誘い、香村は婚約指輪を贈った。

一度。二度。三度。チャンピオンはボールを左手でついた。乾いた音が響いた。ボールを真上に投げ、上半身から下半身が綺麗なラインで伸び上がった。サーブはノーバウンドで相手の右腕に命中した。挑戦者はラケットを放り投げ、大げさなポーズでしびれた腕を振り回した。観衆がどっと沸いた。

ダッシュ。ふたたびボレー。

ラケットの意図とはあまりにも違う。嫌うようにしてボールは跳ね、大きくラインを割った。

しかしケイと二人だけの朝食は長くは続かなかった。香村はしだいに寡黙になった。食事をしながら香村は何度も頼杖をついて眩暈がすると言っとうなだれた。眩暈は慢性的につづき、その様子を婚約者は一つ一つ察知し彼女もまた寡黙になった。

ふやけた未来が実体の乏しいメタファーで早くも語られようとしていた。将来を約束した二人にとって、未来が比喻で語られようとするほど偽善的なものはないだろう。ケイは漠然と不安になった。

「いまのあなたの眼はとても冷たい。私を見ていない。何を分析してるの？ 何を哀れむの？ あなたのひとつを決められないことがすべてを不幸にしている」

「・・・」

「そして言葉もないのね。これからもずっとないのね？」

「・・・僕は冷酷だね」

「冷酷なのは冷酷と思うあなたよ」

この愛は所有されない。

\*

観衆がひとしきり歓声をあげた。  
完璧なボレー。  
いつのまにかスタンドは大観衆で埋め尽くされていた。  
喉が乾いた。  
スタジアムからはあいかわらず悲鳴や怒号や嘆息が聴こえていた。選手達は激しい打ち合いを続けている。  
香村は後半のゲームを見捨て競技場を後にした。  
彼は試合の結果を知らない。

\*

香村は車を飛ばして昔よく利用した料理屋に立ち寄った。

店は完全予約制で看板をもたない。煉瓦造りの門は神泉の街に潜むように存在感をなくし、口を開け、横を青山通りが走っていた。

扉を開けると端正な口髭を蓄えた背広姿の案内人が立っていた。丁重に香村を迎え入れた。

冷房がよく効いていた。

「おふたりのご予約でしたね」

「いえ・・・何かの間違いです」

「.....」

「ひとりです」

「ご案内いたします」

指定された席に導かれ、椅子を後押ししてもらった。

統一された無地の麻リネン。藍と群青の麻糸を杉綾に織ったマット。ナプキンは瑠璃色。白陶器に水が張られ、秋の花びらが浮かんでいる。別の皿では細い蠟燭が頼りない火を咲かせていた。

メニューとワインノートを手渡すと案内人はグラスに水を差し、香村の前に置き、片方を下げて立ち去った。

「気持ちの整理がつかない夜には場所のいい郊外のレストランで窓際の席を予約しましょう。そしてそれぞれ自分勝手に思いをはせましょう。それも夕刻、流れの早く

なった街や通行人を眺めなら、お酒も入ればいっそう気は晴れるわ」

「恋人と一緒に食べるならイタリア料理がいい。昔の恋人について考えるなら南フランスそれも安い料理屋へ行けばいい」

教えてくれたのはケイだ。食事とおしゃべりを旨いバランスに保って食卓を豊かにする彼女は天才だった。

「南フランスでは優柔不断にとっても寛容なのかしら。食前の退却、それから逡巡。ぜんぶ許されてゲストはメニューを選ぶ。グラスも選びましょう。そして迷いながら食べ、迷いながら飲む。とても楽しそうよ。食材は光と影を吸い、こだわりのないフォルムと全体に混在されるセンチメンタル。地中海を背にフランス南部で作られる料理は客をますます孤独にするわ」

「約束を破られるより破る方がつらいわ。どんな世界でも、成立は、たとえどんな些細なことでもかならず約束を果たそうとする気持ちが重要で、決定的な意味をもつと思う」

「そしてどんな約束も交わされるときには軽いわ」

「スタジアムはきつい傾斜になってる。テニスプレーを立体的に楽しませてくれるわ。そこで一度は婚約を交わした昔の恋人同士が待ち合わせ、それぞれの姿を捜しだす。男の人は隣に席を設け、女性を待つ。彼女は遅れてやって来る。何万人という群衆の中から二人は昔の恋人を捜しだすことができない。会おうとして導かれず、神様とて見えない、そしてついに終わるのよ」

「東欧かどこかの寒村にある教会。村全体をながめながらぶら下がる鐘。かつて幸福だった二人の日々は、錆びついた鐘ね。予言通り音だけが鳴るの」

「むずかしいね」

「シンプルな物語よ」

手書きで細かく書かれた品書きを丹念に眺めていると案内人がやって来た。

「お決まりですか」

「いやまだです」

一礼し、案内人は背中であぐらをかき、足早に去っていった。

\*

香村は配膳人を呼び付け一輪の赤い食卓花を引き取らせた。ワインノートには飲んだことのない酒が黒インクでびっしりと書かれていた。頼んでもいない食前酒が運ばれてきた。

黒い夏服を着た痩せた婦人が窓を背にして座っていた。黒い帽子が隣の椅子に置かれ、案内人が後ろの帽子掛けに移そうとすると女は動きを制止した。女はすでに老いについて考えさせられる年齢だった。品ある服と装飾を身につけている。肘まで隠れる黒いロンググローブをはめて老女は巧みにフォークとナイフを操った。

烏貝の底辺から朱身色の肉塊を丸ごと取り出し、口に入れ、ペリカンみたいな顎を動かした。食道を肉片が通るたびに空になった貝は重なり、その堆積は秩序を為した。

ソースをパンで拭きとって口へ入れた。咬むと喉の深い皺が動めいた。生肉は焼かれた草に包み、柔らかに咬む。シチューを飲む。……その目は食物を正視していない。老女はスプーンを置いた。ガクリと首を折り、器の縁に唇を付けてシチューを舌先ですすった。そしてソースで汚れた手首から、甲、指の付け根にいたるまででいねいになめた。

欲望は徐々に高まり、さらに背中を丸め、老女は、お祈りをするときのように皿を顔の高さまで両手で持ち上げてスープを飲みだした。老女の舌はすでにテーマを失っている。

女の背中で街の流れが速まっている。

\*

体系。秩序。意志。宇宙。生命・・・  
誰もが今夜のメインディッシュを気にしている。

\*

デッサはホテルにケイを誘った。

「女の体撮ったことないんじゃない」

「飽きるほど撮ったわ」

「あんたのは女じゃなくて物よ」

「言いたいこと言うわね」

「そういう性分なの」

「狂ってるわ」

「貸してごらんよ」

デッサはチェアの下に置かれたケイのカメラを奪って、ケイの体を狙い始めた。

「脚の力、抜きなさい」

シャッターが切られる。

「もっと」 デッサはファインダーから目を離し、肉眼でケイを窺めた。

「力を抜くのよ」

ふたたびカメラが接近する。

「腰をほんの少し右へ、浮かせて」

シャッター。

「顎を上げて。もっと。喉を反らすの」

ケイはデッサの言いなりに体を移動させた。金属音に刺されるようにレンズが体をなめていった。

「頭を……・空っぽにするの」

\*

やがて自分の体は陶酔に近い快感に襲われるだろう。被写体としての予感カメラの目で獲物を追ってきたケイの経験だ。デッサの目がレンズと化して、愉悦を誘う。だがこの息苦しさは何だろう。呼吸もできない。見られるというのはこんなにも苦しいことだったのか。動きを命令するデッサの言葉がケイの喉を絞めつけた。ケイは自分の肉体が被写体であることを忘れていった。

「自尊心なんて捨てるのね」

デッサの声に反応し、カメラの目にいっさいをゆだねさせようとケイは思った。

足の指の間。爪。脚の裏。脛。そこに生えている何本かの毛。ふくらはぎ。太股。その筋肉。言い知れない力が体を襲っているようだ。

デッサの命令がケイの体を裏返し、贅肉のない背中を

見せた。尻を越えて引き締まった腰を写し、美しい背骨に添ってカメラが這う。

肩甲骨でいったん静止するとデッサはプールの水を手で掬って背中に掛けた。ケイは小さな声を出した。そしてケイの濡れた背中に手を滑らせてから黒い水着の止め金を外した。ケイは一瞬戸惑い、だがその事態をそのまま受け入れようとした。

私は捕虜だ。意志は変化するだろう。時間がたてばカメラは逃げていくに違いない。デッサの目は確かだ。ケイはいっそう体の力を抜いた。

優しく白い肌をデッサの手とカメラが戯れている。シャッターの連続する摩擦音。音が止まなければ……うなじ。肩に触れる黒髪。耳。カメラは特別耳殻を観察した。何枚も何枚も耳だけに集中して撮った。そしてうつ伏せの顔を殴るようにシャッターのボタンを押した。音はまるで強姦のように耳を痛めつけた。デッサはカメラの裏の扉を開けて新しいフィルムを入れた。

ケイは下からデッサの顔を一瞥した。視線が合った。デッサもまた息を乱していることにケイは驚いた。

## 8

\*

「やるじゃない」

下から上に声は届いた。

「まだこれからよ」

言ってデッサは二度空砲を鳴らし、ふたたび体勢を整えた。

そして捕虜の腹部に足の甲を滑らせ、ゆっくりと体全体を浮かせ、丸太を転がすように押し上げた。

仰向けになるのよ。指示は明確な力となってケイの体を裏返しにさせると、黒い水着から乳房がスローモーションで零れ、先端が地上を指した。

捕虜の女は目を右腕で隠した。カメラが接近する。それは着地点を探す未確認の飛行物体のように宙空を泳ぎ、だが明らかな意図のもとに、迷いのないカーブを描きながら目的へと辿り着く。そこでひとつ目的が押され、さらにまた目標へと飛行していく。

時間はたっぷりとある。



デッサは被写体の羞恥と両目を覆っている細い右腕を払い退けた。現れた目は濡れるように輝いている。飛行はさらに遅速で近づいている。物体の飛行スピード以上にシャッターを切る指の動きは遅い。遅すぎる。

ケイは目を閉じた。何分かまえ機関銃のように連射されたシャッターの音に反応した体が少しずつ冷えていくように思われた。体はあのシャッター音を求めている。あの音が欲しい。だが飛行する物体は目的も知らせず、じらしながらゆっくりと裸のうえを旋回している。

室内を流れる音楽は捕虜の耳に届いていない。命令にも反応できない。物体の移動とシャッターの切る破裂音だけが刺激する。そして網膜に認知されるのは移動するカメラの影であり、炊かれる光だけが残像となって体全体を息づかせた。物体が臍の真上で停止した。写真家が膝を付くと同時に穴はレンズのなかで拡大し、横たわる女の体から神秘的なうぶ声が上がった。

そしてその神聖な願いを連続撮影する。一心に穴だけをメスで摘出するように狙う。鼻腔。口。毛穴。穴という穴を物体は旋回し、狙い撃ちする。ふたたび呼吸は乱れていく。体が熱い。何十枚というネガに私のディテールが焼かれていく。火のなかで願いはどこまで耐えられるのだろう。

デッサは立ち上がって、被写体の黒い水着に右足の爪先をかけ、それを引きずり落とそうとする。もはや一瞬のためらいもなかった。ケイは自ら水着を降ろし、全裸となって物体の標的となった。物体は、捕虜の上空を飛びながら、ポンヤリした輪郭と麻薬にも似た快樂を与え続けていこうとする。

光の罨にかかったのだ。逃げるべきは私の方だった。ケイは微かな意識のなかで悔しがった。いったいどこへ連れていかれるのだろう。物体は意志を持続する。謎を駆け、クライマックスへと飛行を続けていく。

苦しく、息ができない。このままでは殺される。

安定した丸い丘のうえで赤い先端が騒いだ。

\*

われわれに見えるのは、われわれが見ようと思う物だ

けだ。  
部分の一つ一つに全体を写し出そう。

\*

「私も熱くなったわ」  
そう言ってデッサはバスローブを外し、花柄のセパレートの水着を脱ぎ捨て、プールに飛び込んだ。  
ケイは割れる水の音に目が醒める気がした。  
深く潜行し、浮き上がって、両腕を繰り出していく。  
「気持ちいい！ ケイ、いらっしゃい」  
急激に体が冷えていった。裸のまま泳ぐのはケイにとって初めてだった。水と一体になれるような気がした。  
二人は得意のクロールを披露し合ったあとプールの真ん中で潜伏を繰り返し、ふざけあった。  
プールサイドはいつのまにか二人だけになっていた。

1

\*

デッサが鉄棒を利用して水から上がる。  
「あんたの野心なんか男に対する見せつけでしかないのよ。あるいは香村に守られようとする女のあさはかな打算」  
「・・・」  
ケイは水中からデッサを見上げている。  
「あんたの女の野心というの、見せて欲しいよ」  
「男は・・・」  
言いながらデッサは飛び込み台のうえに立つ。そして両腕で腰を支えて悠然とプールに向かう。  
「男はできるだけ遠くへ飛ばそうとする。おしっこも、野心もね。こんな具合にパイプ掴んでね・・・」  
ケイがプールサイドに両手を付いて腕力と腹筋で水から這い上がる。  
「男の人の野望は、単純なんだ」  
「遠くへ飛ばせるもんだから・・・勘違いするのよ。女はね、遠くにとぼすためには、四つん這いになるか、ほらこうやって後ろ向いてお尻突き出すか、どっちかよ」

デッサが飛び込み台に尻を乗せて両足を高々と上げて開脚し、小便を始める。

「あんたもやりなよ」

ケイはプールサイドに腰を降ろして、同じように液体の野心を飛ばす。

誰もいないプールに二人の野心が小さな弧を描いて落ちていく。

「男はできるだけ遠くへ飛ばす」

「女は？」

「女は・・・」

私たち無様で愉快ね。

二人の女は大声で笑い始めた。

\*

「ひと降りありそうね」

デッサが言った。ガラスファイバーの屋根から東京の空が見えた。雨雲は西の空を覆い、東へと流れている。ホテル周辺はとくに黒く、今にも泣きそうだ。

「雨は嫌い？」

「いいえ」

「マニラの雨命懸けで降ってくる」

「東京は？」

「しょぼくれてる」

ケイは笑った。

「マニラには灯りの文明が存在しない」

「太陽が強すぎる」

「マニラ、御存知？」

「この半年フィリピンに潜伏してた」

デッサが笑った。

「私は今日本に潜伏してる」

ケイが笑った。

「つよい光線が全部だめにしてしまう。夜景が綺麗なのは汚いものを見えなくするからでしょう。マニラの光はつまらない。あまりに強すぎる。私陰影を東京で知った。東京は陰影の文明よ。マニラはすべてに太陽が邪魔をする」

「太陽が邪魔？」

「そう」

「うらやましい」

「フィリピンで何をしてたの？」

「二月革命の取材」

「……」

ケイはデッサの横顔を見た。深く遠い視野があった。

「あれは革命なのかしら」

「母国の騒動はいやね。それを取材する私の存在も……」

「真実は海外へ伝えるべきよ」

「ありがとう」

「真実にかぎるわよ」

ケイは笑みを作った。

「父はマルコスの側近だった」

「そう」

「反政府ゲリラを徹底的に弾圧した父は革命政権ができる直前になって姿をくらました。私は台北のアパートで友人たちとテレビを見ていた。父らしき人物が群衆に紛れて立っていた。たしかに父だったはずよ。画面はすぐに切り変わったわ。でも今思うとあれが父だったかどうか……」

「クーデターね」

「もう半年にもなる。処刑が怖いマルコスはイメルダと一緒に一足先にアメリカへ亡命した。彼らは逃げ足の早いことでも一流よ。父の居場所を知りたい。……」JVを訪ねたのはそのこと」

「JVって？」

「香村がよく知ってる。人生を休んでる人。飄々として楽々と人生を生き、たっぷりと呼吸し、醒めながら眠り続ける」

「ほんと、彼が好きそうな人ね」

「そうかしら」

「彼がソウルで会ったという実業家でしょ」

「会おうとして会えてはいない」

「そうだったの」

「JVは父と古くからの友人。フィリピンの砂糖産業を牛耳っていた父は砂糖を横流しする見返りにアメリカの商社と手を組んで台湾や日本から繊維を密輸していた。ポリエステルもナイロンも人民には見分けがつかない。多くの知恵と資本がJVから来ていた」

「あなた、台湾で何をしてたの？」

「あんたのようなことよ」

「何かしら」

「遭難」

「……」

「嘘よ。潜伏。地下で映画を作ってもいた。それはそれで面白かった。今年の五月だった。台北市内の竜山寺を拠点にデモが起きた。ざっと千人規模の人間が集まってピラが撒かれた。プラカードもなくシュプレヒコールもない静かな反体制のデモだったけど、友人達は古寺の崩れかけた外壁によじ登って色めき立ったわ。こんなの四十年ぶりのことだって。ビデオ回せってうるさかった。でも装甲車が出動して、二、三十人の軍隊が姿見せた途端にデモは蜘蛛の巣散らしたわ。頭の古い指導者たちはいまだに反共を政争の道具に使うって、戒厳令を敷いている」

「揺るぎない体制」

「取材したことあるの？」

「ええ」

「地下活動はにわかに動きだしてる。自主映画の連中は全員根アカの反体制。ロケ先はすべて現実の台湾よ」

「革命を志してるの？」

「二月革命に刺激されていることは事実ね。当局は警戒を強めてもいる。とくに台南を拠点に秘密組織の動きは活発化しているわ。止めようがない。だけどだめよ。台湾はだめ」

「どうして？」

「インテリだけだもの騒いでいるのは。大衆は動かない。連中は民衆を押さえ切れなかったフィリピン政府をバカにし、それだけ台湾政府を恐れてる。マルコスなんていい笑いの種だ。アメリカの尻なめるホモ野郎って皆言ってる。彼等は慎重にサイコロを振る」

デッサは一定のリズムで喋りつづけた。

「……私は革命運動家ではないわ。面白くて見てるだけ」

「見てるだけか……」

「香村の山荘で薔薇が入ったお茶をごちそうになったわ」

「山荘？」

「そう山小屋。彼の自宅」

ケイは声を出して笑った。  
「たしかに殺風景ね」  
「遭難者を待ってるって言ってた、香村」  
「そう」  
「あんたのことじゃない？」  
「・・・」  
「お茶おいしかった」  
「そう」  
「親切な味ってとこかな」  
「親切？」  
「日本人はとても親切。だけど」  
「だけど？」  
「だけど・・・バカね。ここじゃあクーデターも起きない」  
「ベトナムのお茶はどんな味？」  
「知らない。たぶんフランス人が喜ぶ味よ」  
「フランス人は日本茶を飲み過ぎてる」  
「イギリスの色が嫌いなだけよ」

1

\*

リクイニングチェアー。フィルムの上。女の水着。...  
...  
二人の女はプールを出、ホテルのバーで酒を飲み、レストランで思う存分食べた。